「薬草を楽しむ」　No.062

マロニエ（セイヨウトチノキ）

牧　　幸　男

５月も中旬頃になると、春も終わりを告げ、新緑が濃い緑色に変わりはじめる。この時期、マロニエの花や大きな葉が目立つようになる。よく観察すると、味わい深い植物であることが分かる。先ず、薄くしなやかな若葉の頃、太陽に透かした葉に葉脈の浮き出る姿、次に、掌状複葉の先端に高さ 20 ㎝以上の花序を何本も立て、大きな花を付ける姿が素晴らしい。

マロニエの花

このマロニエの植物名を耳にすると、多くの人はパリのシャンゼリゼ通のマロニエの並木道を連想するかもしれない。並木と言うより大木で高さ２０m以上に成長している姿に、強い印象を受ける。この並木路を歩いていると、並木道路を歩いていると言うより明るい林の中を歩いている感じがする。世界４大街路樹と言えば、他にプラタナスナス（和名：鈴掛の木）、楡（にれ）、菩提樹（ぼだいじゅ）が有名であるが、シャンゼリゼ通のマロニエは最も素晴らしい並木と思う。

マロニエついての最初の記述は、1562 年の博物学者ピエトロ・アンドレア・マッティオーリ Pietro Andrea Mattioln(1505～77)の主著『ディオコリデスの著書の注解』(1554)である。原本はギリシア人の著述家ペタニウス・ディオコリデス Pedanius Dioscorides,(40 頃～90 頃)の『ディオコリデス薬物誌』（70 年頃）である。

マロニエはトチノキによく似た大型のトチノキ科の落葉高木、ギリシアの山地に自生していたが、ヨーロッパの他の地方ではあまり知られていなかった。原産地はバルカン半島からコーカサス、更に西アジアに至る狭い地域の山地に自生していると言われているが、今日では、広く膾炙された樹木となりヨーロッパ各地で広く栽培され、パリやマドリード等ヨーロッパの大都会では街路樹、公園樹として用いられている。樹高は成長すると 36m の高さになり、ドーム状の樹冠が形成される。葉は掌状複葉で、大きな葉を長い柄で互生するが、トチノキに比べてやや小さい。5 月頃には枝先に大きな円錐花序を付け、トチノキに似た花を多数付ける。花の色花は、通常白色で赤い斑点があるが、ピンクのものもある。トチノキの花に比べると大形だ。果実は２～４cm 緑色で柔らかい棘が多数ついているが、トチノキでは棘がない。

マロニエの果実

長野県内でよく目にする赤花（ベニバナトチノキ Aesculus × carnea）はアメリカ原産のアカバナトチノキとヨーロッパ原産のセイヨウトチノキ（いわゆるマロニエ）を交配した樹木で、濃いピンク色の花が特徴。トチノ属の染色体は概ね 2n=40 であるが、本種は 2n=80 と４倍体である。わが国には明治時代中頃に渡来している。

マロニエの木はヨーロッパでは人気があり、1576 年にウィーンで植樹されて以来、次々と並木や公園樹木として利用されるようになった。現在も並木、公園に多く植樹されるだけでなく、レストランの中庭などで夏の木陰を提供している。ウクライナでは、19 世紀初頭にマロニエを

植えることが流行して以来、その熱は冷めることなく続き、実際にマロニエの樹がキーウ市内にたくさん植えられ、首都キーウのシンボルとなっている。松本市の「鯛萬」のマロニエは、パリの並木をイメージして植えれたとのこと。

鯛満のマロニエ

又、マロニエは、虫媒花で蜜蜂とは共生関係で、蜜蜂に蜜を提供するだけでなく、花粉が運ばれる恩恵もある。更に多くの画家がマロニエを描いており、フィンセント・ファン・ゴッホの晩年の作「花咲くマロニエの枝（日本名：花咲く栗の枝）」は、盗難に遭ったが、無事発見されたこともあり有名な絵として知られている。

アムステルダムの中央に植樹されているマロニエは、「アンネ・フランクの木」として知られている。アンネリース・マリー・フランク Annelies Marie Frank は『アンネの日記』（別名キティーKitty）の中で言及しており、彼女は、隠れ住んでいたアムステルダムの屋根裏部屋からこのマロニエを見ることができた。彼女は日記に、冬に葉が落ちても春になれば再び緑になるのだという希望の言葉を記述している。2010 年に、この木が枯れた時その種子から苗木を育て、希望のしるしと、お互いに理解し多様性に敬意を表する社会への願いの象徴として、各地に配布された。

植物名について、牧野富太郎博士は「フランス語のマロニエ marronnier、英名の horese　chestnut どちらもクリの連想に基づく名で、これを直訳してウマグリの和名がある」と述べている。別名では、栃の木、橡の木、「と」とも呼ばれている。「と」は数字の十で、「実が多い木」が植物名の由来である。一般にセイヨウトチノキ（西洋栃の木）、マルメロと呼ぶことが多い。別名の、ウマグリ馬栗は、栗のような種子を馬や家畜の飼料に使ったり、ウマの咳を治す薬に用いたりしたことから、このような名称で呼ばれるようになったといわれている。

学名は、Aesculus hippocastanum、属名は aescare 食べるに由来、果実が食用や家畜の飼料となるため、種小名はトチノキの古名、馬の栗の意である。仏名は châtaignier des chevaux（馬の栗）、 marronnier、英名は Horse-chestnut, Conker tree である。

薬用は、当初種子のエキスを、関節痛、膀胱や胃腸の病気、発熱、脚の痙攣などに使われていた。現在は慢性静脈不全、足の静脈による痛み、腫れ、かゆみ等に使われている。なお、馬に薬効があると言われているが、証明はされていない。

食用は、果実には種子が甘栗に似ているが苦味があるので、長時間かけて実を茹でると食用になるが、いわゆるマロングラッセの原料は別種である。このマロングラッセ（日本名：栗の砂糖漬け菓子）は、有名であるが、原料は栗で、最高級品はイタリアの「マローニ種」と言われている。ヨーロッパでは、紀元前マケドニアの英雄アレクサンドロス大王が最愛の妻ロクサネ妃のために作ったことから、ヨーロッパでは永遠の愛を誓う証として、男性が女性にマロングラッセを贈る習慣がある。その他、フランスやスイスで麻や亜麻、絹、羊毛等の脱色に利用したり、粉末を洗濯に利用いたこともある。イギリスやアイルランドでは、種子が子供の遊びに使われている。種子は英語で conker（コンカー）と呼び、子供たちはこれを使って「コンカーズ」という遊びをする。この遊びはコンカー（種子）に孔をあけて靴紐を通し、紐を振り回してぶつけ合って、相手のコンカーを割るというものである。

マロニエの花

なお、この果実を、客間に飾るとクモを避けるという迷信がる。

花言葉は、「贅沢」「天才」「天分」「博愛」である。